財団法人日本交通公社

観光文化

Tourism & Culture

209
September 2011

特集◎東日本大震災からの復興に向けて、人の動き、ツーリズムを創造する

―― 東北の持つ潜在的な「文化の力」を探る

◆巻頭言

東北の「文化の力」のベクトルを「復興の力」に向ける
―― 地域文化とコミュニティーのアイデンティティーは人の動きを生む　近藤 誠一……①

◆特集

・**「文化力」を「復元力」につなげる東北の震災復興**　北原 啓司……②

・**都市文化の力**
―― 紡ぎ、つながり、復興へのパワーを生む　奥山 恵美子……⑥

・**「絆」で広げる温泉の可能性**　遠藤 直人……⑩

・**地域に守られ飲み手に支えられる日本酒の文化**
―― 地産多消から地産地消を目指して　菅原 昭彦……⑮

◇研究ノート　**三陸の観光復興**
―― 岩手県田野畑村の取り組み　大隅 一志……⑳

◇特別寄稿　**観光統計をより科学的に捉える**
―― 観光統計を活用した実証分析に関する論文表彰と募集
国土交通省観光庁参事官室（観光経済担当）……㉔

◆連載

Ⅰ　あの町この町　第45回
聖と俗 ―― 和歌山県高野町　池内 紀……㉘

Ⅱ　ホスピタリティーの手触り 66
真夏のヴェネチアにて　山口 由美……㉞

◆新着図書紹介……㊱

富岡製糸場・養蚕の舞

一八七二年（明治五年）十月、群馬県富岡製糸場は日本近代化の先駆けとして生糸の生産を始めた。現在、富岡市は明治初期の美的建築の残る「富岡製糸場」の文化遺産登録を目指し活動を続けている。二〇〇七年一月、日本の近代産業発展を伝える史跡としてその価値が認められ、「世界遺産暫定リスト」に記載されたのである。こういった背景から富岡製糸場では歴史的建造物を公開してきたが、その一環で、夏祭りの催しの目玉として、二〇一〇年夏、「養蚕の舞」が行われた。座長の高橋哲一郎さんが「毎年、春の例祭が赤城神社で行われる。その奉納のために舞を神社境内で行いますよ。座員は三十代から六十代で二十人、舞を踊るのは六人、はやし方は三人の陣容です」と語ってくれた。群馬県は養蚕の盛んな土地柄であった関係上、伝統芸能が生まれた。渋川市下南室（しもなむろ）にある「太太御神楽（だいだいみかぐら）」講という伝統芸能の会の人たちによって演じられ、一般見学者たちは真剣に見入っていた。

（写真・文　樋口健二）

東北の「文化の力」のベクトルを「復興の力」に向ける

～地域文化とコミュニティーのアイデンティティーは人の動きを生む～

文化庁長官　近藤　誠一

三月十一日の大震災は、東北の持つ地味だが深い味わいを表面化させた。それは中央の支配を受け続けた歴史であり、貞観の大津波など、三陸を繰り返し襲った巨大津波の考古学的痕跡であり、東北に点在する縄文遺跡である。そして厳しい歴史と自然のなかで伝えられてきた豊かな郷土芸能、とりわけ季節の祭りである。

これらは、今の日本人の毎日の生き方の表層が、明治維新や戦後の枠組みのなかで設定された、極めて最近の、西欧的な思想に基づいていることを気づかせてくれる。また日本の正史によって描かれてきた古代以来の日本国の奥に、縄文文明という別の日本が重層的に存在することが垣間見えてくる。

縄文人は一万年間にわたり、狩猟・採集の移動生活を送っていた。やがて大陸から伝わった稲作を基礎とする弥生文化が、中央政府による統一とともに、畿内から東西に広がった。それに最後まで抵抗し、「まつろはぬ（従わない）」人々と呼ばれていたのが、東北の蝦夷（えみし）である。芭蕉が「光堂（ひかりどう）」と呼んだ平泉中尊寺の金色堂を建て、百年の平和を達成したのも、蝦夷の流れをくんだ奥州藤原氏であった。その栄華は頼朝によって葬り去られた。近代では戊辰戦争での会津藩の敗北と、白虎隊や二本松少年隊による勇敢な抵抗が思い浮かぶ。

辺境の人々とされてきた蝦夷がこの間にどうなったのか分からない。しかしそれは、いつの間にか表舞台から姿を消した縄文人と重なってくる。百五十年間で見事に西欧化し、科学技術によって自然を制御しながら快適な生活を送っている現代の我々が、森や海と一体となった縄文人の生活に何か郷愁や憧れに近い感情を抱くことと、これはどう関連するのだろうか？　それは日本人とは一体何者なのかという根源的な未解明のテーマに我々をいざなう。

東北の文化が持つ力は、単なる自然や伝統芸能にあるのではない。西欧文明導入や弥生文明の成立以前から続く、自然と一体になりながら困難を乗り越えてきた歴史がそこに刻み込まれているところにある。そしてそれが東北人の生きざまと日本人にとってのアイデンティティーとを深いところでつなげてくれるところにある。それは我々を日常性から解放し、時空を超えて、二一世紀の人類の在り方について、新鮮なインスピレーションをも与えてくれる。これが復興の原動力になるだろう。

東北は今、歴史上初めて世界の表舞台に立っている。東北の復興は単に東北だけの復興ではない。それは人類の再生につながるものとならねばならない。

（こんどう　せいいち）

東日本大震災からの復興に向けて、人の動き、ツーリズムを創造する

――東北の持つ潜在的な「文化の力」を探る

東日本大震災で被災地では、各地域で育んできたコミュニティーや伝統的な文化を維持していくことの大切さを実感しています。今号では、東北の文化に精通された方々から復興に向けて、東北の持つ「文化の力」についてさまざまなご提言をいただき、「文化の力」に潜む今後のツーリズムの可能性について紹介します。

特集 1

「文化力」を「復元力」につなげる東北の震災復興

弘前大学教授　北原　啓司

震災復興の現場から考えること

一生忘れることがないであろう大きな出来事を半年前に体験した私たちは、その後、次々と出てくるさまざまな問題と向き合いながら、あっという間に秋を迎えてしまっている。まちづくり・まち育ての現場にずっと関わってきた私は、決して防災計画や耐震構造の専門家ではないものの、復興に関わるさまざまな地域の現実と向き合う時間が予想以上に増加し、家族に寂しい思いをさせているこの半年間である。

そんな中で、『観光文化』から原稿依頼を受けることとなった。なぜ、いま私に、という疑問が最初に浮かんできたものの、あえて、この時期に私に原稿を依頼してくださった編集者に敬意を表して、ここは受けさせていただくことにした。

全く話は変わるが、今年のゴールデンウイークに宮城から岩手にかけて津波の被災地を回って北上していた時、「被災地ツアー」とでも言うべきグループや個人とさまざまな場所で遭遇した。まだ建物の残骸がそのままになってしまっている場所、何もかも跡形もな

くなってしまった空間、それでも地域の人々が元気に生きていこうとされている場所など、報道や復興関係者、ボランティア組織とは明らかに異なる人々が、明らかに現地に存在していた。

最初は、私自身、あまりよい印象は持てないでいた。「物見遊山的に被災地を回っているなんて」「よくその場所で写真を撮ることができるなあ」。そんな気持ちでいっぱいだった。でも、そのうち、その方々の表情を見て、また時に言葉を耳にして、彼らのなかには、いても立ってもいられなくなって自分の大好きな風景を見に来た人々がいるということに気づいた。その人々の人生そのものを語る時に必ず出てくるであろう原風景。人生の大事な時にその「場」の力を借りて、いや風景に背中を押してもらいながら、思い切って一歩前に踏み出した人もいるであろう。それがいま、どうなっているのか、それを自分の目で確認しに来たのではないか。そしてファインダーをのぞく目には浮かんでいなくても、きっと頭の中で涙は流れていたのだと思う。

ある意味でリピーターと言えるのかもしれない。だから、気になる。あの風景、あの人々の笑顔、あのおいしい海の幸。つらく悲しい観光だった。すべてが無くなってしまったかもしれないけど、きっと、光が残っているはずだ。それをどうしても見たい。そんなツアーを初めて見た、このゴールデンウイークであった。

とはいえ、我々のような復興に関わる専門家であっても、デジタルカメラ片手に現地を回っていれば、地元の被災者の皆さんには、観光客と一緒に見られてしまうのだろうなと自覚している私がいた。まさに、そうであった。私は、被災地のなかで私自身が元気をもらえるような風景を撮りまくった。これから果てしなく長丁場になりそうな復興に向かう自分の気持ちを鼓舞すべく、そのような風景を探してはシャッターを切った。

あまりにも有名になった、陸前高田の松原でたった一本だけ残った松の木。気仙沼の被災地で凛と立っていた神がかり的な鳥居。

一方で、このような大変な状況におかれながらも、端午の節句にこいのぼりを飾ろうとする人々の力強さ。**（P4 写真 上・中・下）**

こんな風景を、私は被災地でたくさん発見した。自然の力、神の力、そして人の力を感じ、それをこれからも信じて、未来を思う。その場所と、とことん付き合う覚悟がなければ、いくら専門家であっても、単なるツアーでしかない。しかし、このツアーで、パワーをもらう人々もいるということに気づかされた今年のゴールデンウイークであった。それこそ、まさに光っているものを観るという意味での「観光」であった。

東北で闘うために

この三月以来、いくつかの雑誌に原稿を依頼され、また講演をさせていただき、常に口にしてきたことであるが、伊勢市（三重県）生まれで、宮城県で育ち、その後弘前（青森県）を仕事の場とする私が常に意識してきたのは、尊敬する美術家の村上善男氏が、かの岡本太郎氏からいただいた「東北で闘え」という言葉である。霞が関で検討されて、全国に広がっていく都市計画の考え方を、東北ならではの考え方に変えていくというのではない。東北で考える都市計画の考え方が、霞が関が考える都市計画の内容に大きなインパクトを与えて、変えていくことになるという気概を持つということである。

そんな信条で、私はずっと弘前にいて、わが国の都市計画を思ってきた。地域の豊かな資源に立脚して（光っているものをいっぱい見て）、東北のさまざまな都市のまち育てに参加させていただいてきた。

今回の津波の被害で、その豊かだった資源が、目の前から消えてしまったまちがいくつも

写真上）陸前高田の松原でたった一本だけ残った松の木
写真中）気仙沼の被災地で凛と立っていた神がかり的な鳥居
写真下）端午の節句にこいのぼりを飾ろうとする人々の力強さ（陸前高田）

ある。専門家と呼ばれる我々が現地に赴いても、役に立つような言葉を、全く発することのできないような光景が現地にはあふれている。

話は変わるが、四月に約十日間をかけて実施した「日本建築学会まちづくり展」で、その実行委員長をさせていただいた私は、そこで多くの知見とともに、今後の復興に関わる自分自身のスタンスを明確にすることができた。そこで得られた重要なキーワードが復

元力（レジリエンス）であった。我々は、被災地で何を復元しようとすればいいのか。いや何を復元しようとしている人々を支援すればいいのか。それは、経済力の復元なのか、失われてしまったさまざまな機能の復元なのか、それとも風景そのものの復元なのか。

しかし、私はこう考える。それは言ってみれば、東北であることの復元なのではないか。

東北であること、それは東北固有の文化を「地」にした、多様な「図」の展開である。東北という言葉のくくられ方自体が、東北を語る時に適切ではないのかもしれない。多元的な価値観が自然・風土を背景にして個別に形成されてきた多様な地域の柔らかな統合体としての東北は、言ってみれば魅力的な図柄の宝庫なのである。だからこそ、今回の震災で、その被害の様相は、被災地の数だけ個別にあると言ってもいい状況なのである。霞が関で簡単にパターン化できるような地域ではないのである。それが、我々の東北である。

東北の復元

しかし東北は、いつも中央に周縁と位置づけられ、ずっと後方から追いかける存在であると錯覚させられてきた。それは、中央が東北のポテンシャルを恐れていたからではなかったか。三内丸山遺跡（青森県）からは、縄文は決して弥生が生まれる前のやや劣る文明という位置づけではなかったことが見えてくる。平泉の藤原氏は、平家と源氏の闘いを遠目で見ながら、東北にユートピアをつくりかけていた。それに気づいた源頼朝が弟を犠牲にしてまで平泉を滅ぼしたと書いたら、ちょっと言いすぎだろうか。

戊申の役で最後まで幕府を守ろうとした会津を中心とした東北の諸藩は、封建的な体制に固執するしかない、時代についていけなかった人々と言われてしまうのだろうか。そうではないと思うのである。東北人は静かにスジを通すのである。そしてそれに命を懸けて東北を守ろうとした。宮澤賢治のリベラルな思想に、時代はついていけなかった。トップを走り抜ける彼の卓越した世界観は、ネガティブな位置づけのなかで育まれた東北人ならではの感性から形成されたものであったはずである。

そういう意味では、今回の大震災の後で東北で期待される復興は、阪神・淡路大震災とは異なった切り口の方策を生み出す可能性がある。おそらくそれは、今回のような大きな災害が起きなくても、いずれ顕在化するはずだったものだと思う。大津波が、予定よりも十年も早く、政策の転換期を我々の眼前に連れてきてしまったのかもしれない。周回遅れのはずが、もしかしたらトップを走らなければならない存在になってしまっているのである。

東北の「文化力」は、単なる東北の復元という次元を超え、新しい価値観、新しい生活、そして新しい地域づくりの思想を生み出す源となっていくはずである。東北は、そこに東北であることの真骨頂をアピールしていくことになる。

農業中心の地域であるが故に、土地の所有にしがみついてきた東北人が、この震災で壊滅的な打撃を受けた沿岸部の漁師たちの姿を見て、もっとスケールの大きい海との関係性を大事にする、言い換えれば、海を畏れ、海を愛する彼らの思想に触れ、「所有」とは異なる「利用」という関係性を重視する発想に転換することができれば、東北のまちづくりは飛躍的な転換を遂げるはずである。

そのプロセスは、一気にいくものではないかもしれない。しかし、私は、そのきっかけとなるような光を見いだしながら、それを観て全国に伝える「観光」を生きている限り続けながら、震災復興の多様な場面に寄り添っていきたいと考えている。

（きたはら　けいじ）

特集２

都市文化の力
――紡ぎ、つながり、復興へのパワーを生む

仙台市長　奥山　恵美子

被災者の心を癒やす　都市文化の力を再認識

都市が紡いできたさまざまな文化の力を、今回ほど感じたことはありません。未曽有の被害をもたらした東日本大震災から、復旧、復興へとひた走るなかで、演劇や音楽が、被災者の心をどれほど慰め、支えたことか。文化の役割を再認識させられた日々だったといって過言ではないでしょう。

なかでも、「楽都仙台」として積み重ねてきた音楽による絆が、世界的な支援の輪として広がっていったことは、極めて印象的な出来事でした。

「非常時に文化は二の次」というご意見もあることは承知していますが、人が過酷な体験から立ち上がろうとする時、文化は欠くべからざるものとの確信を得ています。文学、演劇、音楽がどのような力を発揮したか、特に音楽を中心として、関係者の活動を基にその一端をご紹介いたします。

震災と文学

多くの映像や写真で津波や地震災害が捉えられたというのが、今回の震災の特徴です。それでも、一人ひとりの心の内なる「震災の体験」を伝えるのは、「言葉」にしかできない役割です。

震災後、被災した作家や詩人たちの体験や、被災地を訪れて見聞きしたレポートが、新聞、雑誌で相次いで発表されました。仙台市在住の作家、伊集院静さんや佐伯一麦さんの体験記を読んだり、テレビでご覧になった方も多いと思います。福島県在住の詩人、和合亮一さんは、ツイッターで詩編「詩の礫」を発表し、注目を集めました。

仙台文学館は、震災による被害で休館していましたが、六月二十四日から運営を再開。古今の文学作品で震災がどう表現されてきたかをたどる企画パネル展「文学に見る震災」を開催し、今回の震災を将来にどう伝えていくか考えるきっかけとなりました。また、仙台文学館には、仙台ゆかりの作家たちからのメッセージが寄せられ、言葉の力で、被災者への慰めと、震災と向き合って復興していく勇気とを与えてくれています。

震災と演劇

今回の震災では、最大震度６強、三分を超える強い揺れが市街地を襲いましたが、ビル群が倒壊する被害は発生しませんでした。しかし、倒れなかったから大丈夫だったわけではありません。文化施設やホールでは、設備損壊、天井の落下など、施設内部で大きな被

トラックの荷台を舞台に、
「セロ弾きのゴーシュ」

害が発生し、ほぼ全ての施設が休館に追い込まれたのです。

ホールや劇場の休館で、演劇関係者、音楽関係者は、活動の場を失うことになりました。

そのようななか、演劇関係者はそれぞれに、子どものための演劇公演、絵本の届け物、朗読劇、市民ミュージカルづくりなど、手探りで避難所への訪問活動を始めます。

また、仙台在住の演劇人を中心に「アート・リバイバル・コネクション東北（愛称・あるくと）」を結成。演劇やアート活動で被災地を応援したい人と、被災地との間を取り次ぐネットワークを作る動きも生まれています。

震災と音楽

震災から二週間後、被災地にオーケストラの響き

仙台フィルハーモニー管弦楽団（仙フィル）も、ホール休館の影響を直接被った一つです。楽団員と事務局員は全員無事、楽器の被害も最小限にとどまったものの、ホールの再開のめどが全く立たないなかでは、東北一円での演奏活動は当面諦めるしかありませんでした。

その時、仙フィルはどうしたか？　何と、震災からわずか二週間後、仙台市内のお寺で復興コンサートを開催したのです。

聞けば、「仙フィルにできることは、被災者に音楽を届けることだ」という、地域に支えられ、成長してきたオーケストラとしての、一種の使命感だったということです。

仙フィル「復興コンサート」　（写真：佐々木隆二）

関係者の協力で演奏会の場所が見つかったとはいえ、交通・ガス・水道などライフラインは復旧途上、ガソリン不足や物資不足がまだまだ続き、市民生活は困難を極めていたころです。避難所暮らしを強いられている被災者も多く、社会全体が自粛ムードに覆われるなか、演奏会を開催することへの葛藤もあったといいます。

不安を抱えた急ごしらえのコンサートでしたが、当日は、予想を超える百人の聴衆が集まりました。手元に、復興コンサートの様子を伝える新聞記事があります。

《感極まって涙をぬぐう市民も。音楽で犠牲者を悼むと共に、最後はふるさとの復興を祈って観客も一体となり唱歌「故郷（ふるさと）」を響かせた》（三月二十七日付「河北新報」より）

つながれ心、つながれ力「音楽の力による復興センター」

仙フィルは、さらに動きます。「音楽の力による復興センター」を立ち上げ、被災地や避難所での演奏活動事業を始めたのです。

活動資金の提供、演奏活動をしてくれるアーティスト、演奏会場の場所などの提供を呼び掛け、マネジメントを開始。音楽で支援

したい人、音楽を聴きたい人のパイプ役も買って出たのでした。

三月二十六日に始まった仙フィルの復興コンサートは、四カ月で実に百八十回を数えます。仙台駅前のビル「アエル」での三十七日間に及ぶマラソンコンサート、避難所に出向いての演奏会。コンサートの最後には、全員で「故郷」を合唱することが定番となりました。

「音楽の力による復興センター」の活動は大きな反響を呼びます。国内はもとより、海外からも次々と支援の申し出が寄せられ、

仙台駅前ビル「アエル」での「マラソンコンサート」　（写真：佐々木隆二）

「音楽の力」が被災地に注がれることになったのです。各地でのチャリティー演奏会開催や、仙フィル招聘の申し出も次々と舞い込み、センターも仙フィルも、フル回転で踏ん張る日々が続いています。

クラシック音楽に沸く三日間 今年も「せんくら」を開催します

仙台市の「楽都」事業としては、大きくは若い才能を発掘しようという「仙台国際音楽コンクール」と、クラシックの裾野を広げようという「仙台クラシックフェスティバル」があります。

仙台クラシックフェスティバル、略して「せんくら」のコンセプトは、「クラシック音楽の〝はしごゃ〟」。杜の都の秋の風物詩として定着し、県外からの観光客も訪れ、毎年三万人を超える人でにぎわう音楽イベントです。

今年も開催できることとなったのは、アーティストの方たちによる温かい支援の輪の広がりのおかげでした。

指揮者の小澤征爾さん、小林研一郎さん、飯守泰次郎さん、バイオリニストの徳永二男さん、ピアニスト小山実稚恵さんらが「せんくら発起人会」を立ち上げて、「せんくらへ行こう」と呼び掛けてくださったのです。

ホール系施設の修復が進んでいないため、「せんくら」の公演数は例年に比べて半分ほどですが、街なかコンサートや地下鉄駅コンサートなど、「市民が演奏者となって音楽を届ける」ステージ数を増やしました。今年もクラシック音楽であふれる三日間となるはずです。

仙台クラシックフェスティバル

市民の間でも「音楽の輪」

「音楽の輪」は、市民の間でも広がっていくことになりました。

四月から毎週末の街角では、復興支援のチャリティーコンサートが開催され、合唱団が次々に登場しました。ちなみに、出演のトップバッターは、宮城三女高（現・宮城県仙台三桜高校）とOG合唱団。宮城三女高合唱団は、森山直太朗の「さくら（合唱）」でコーラス共演をしている、合唱の名門校。通行人が立ち止まって聴き入る光景が見られました。

仙台の合唱団「萩」（東北大学男声合唱団OBや地元合唱団の有志）は、五月にニューヨークのカーネギーホールでチャリティーコンサートを開催し、義援金と、現地からのたくさんの励ましの寄せ書きをいただきました。

さらに、音楽つながりでは、ちょっと変わった例を一つ。この八月に、津波被災した仙台市の小学生がクロアチアに招待され、首相以下の歓迎を受けたのですが、このケースなどは、一九九五年に仙台で開催された「第2回 若い音楽家のためのチャイコフスキー国際コンクール」のチェロ部門優勝者がクロアチア出身者であったことによるものでした。

被災地を支援したい人と被災地のマッチングが重要

今回、「被災地を支援したい人と、被災者とをつなぐ」役割が、演劇でも、音楽でも、関係者の間で生まれました。見過ごされがちですが、「支援する側の支援や好意が、それが必要な被災地に届き、喜ばれるものになる」ことは、支援のありようを考えるうえでとても重要です。

特に、音楽については、被災地と支援者をマッチングするシステムが戦略的に組まれたことが、後々の大きなムーブメントへとつながっていった要因ではないかと思います。

仙フィルの一歩がきっかけとなって、世界中から音楽の支援が仙台へ寄せられるようになったのですが、その「一歩が生きる土壌」が仙台にはあったのだと思います。

震災の記憶を風化させないために復興メモリアル

復興を進めていくうえで、東日本大震災の教訓を生かし、記憶を風化させないための施策も重要になってきます。将来に向けた最大の防災対策となるからです。

政府の東日本大震災復興構想会議では、災害の記録と伝承のために、中核的な施設整備を提言しています。また、策定中ではありますが、仙台市の震災復興計画では、震災の記憶と復興を継承するため、メモリアル施設の整備を盛り込んでいます。各地の震災復興計画でも、同様の構想が盛り込まれることになると思いますが、つくるからには、被災地それぞれに、その地ならではの特色が必要です。

作家の堺屋太一氏が、近著で、大震災からの復興に当たっては、東北の各地が、文化やスポーツの得意分野で「文化首都」をつくるべき、と提言されています。例えば、仙台であれば、完全なシンフォニーホールと練習場を造って、「交響楽の都」とし、交響楽を目指す青少年の憧れの地になるぐらいのことを考えてはどうか、と言及しています。

仙台市は、第二次世界大戦の戦災復興事業終了を記念して、市民の活動の場に適したホール（戦災復興記念館）を整備したという先例があります。震災の記憶を伝えるメモリアル施設、そして都市の特色を生かすということを考え合わせると、仙台にとって、音楽ホールは有力な選択肢の一つと考えられます。そのホールに、「音楽の力による復興センター」のような、音楽を聴きたい人とアーティストの間をマネジメントする機能があれば、さらに理想的でしょう。

復旧はまだ道半ば、復興は、さらに、はるか先です。

大震災からの復興がかなった時、復興メモリアル音楽ホールで、仙フィルの演奏で市民の皆さんと一緒に「故郷（ふるさと）」を大合唱する。その光景が実現することを夢見て、復興への険しい道を進んでいきたいと考えています。

このたびの震災に際して、たくさんの皆さまから復興のご支援をいただいております。心から御礼申し上げます。

（おくやま　えみこ）

特集３

「絆」で広げる温泉の可能性

温泉米沢八湯会　遠藤　直人

「こうなると内需拡大しかない」

三月十一日　東日本大震災が起きた直後、米沢は幸運にも無傷でした。震度5強。揺れで損壊はありましたが、電気、ガス、水道は守られ、宿の命である温泉も無事でした。県内のほとんどの地域が停電するなか、米沢は揺れただけでした。

ところが、情報が明らかになるにつれ、状況は一変。電話が鳴れば、全てキャンセル。山形新幹線も東北自動車道も復旧のめどが立たず、ガソリン不足が追い打ちをかけました。満室だった三月の連休も一瞬でゼロに。

当初、震災後に始めた「被災者受け入れプラン」の利用者はいらっしゃいました。しかし、長引く現実を考慮し、旅館で一時的に過ごしたあとは、避難所やアパート探しに移る方がほとんどでした。

「一体、どうなるのか?」

三月三十日　先が見えない不安のなか、河鹿荘の佐藤雄二社長の声がけで行政や観光関係者の意見交換が行われました。最大の関心は、国が発表した災害救助法に基づく避難者受け入れについてです。福島や宮城の二次避難者を一泊三食五千円で受け入れるという枠組み。「もしかしたら、倒産の危機は回避できるかもしれない」。山形県内の宿泊施設には、わらにもすがる思いがありました。しかし、二次避難者は、さほど多くはなさそうだというのが行政の見方でした。

再び先の見えない不安感に襲われるなか、冒頭の二言。

「こうなると内需拡大しかない」

通常、内需は「国内」を意味しますが、この場合は、「山形県内」。交通機関が絶たれた状況では、県内や地元といった近隣での需要を喚起するしかないという意味でした。まず宿が、地元向けのプランをつくる。それを商工会議所の機関誌や市報に掲載する。バックアップをご快諾いただきました。

米沢八湯、初めての結束

四月二日　小野川・白布両温泉の旅館組合青年部が話し合い、内需拡大プランについて考えました。「2泊5食付きで、昼は地元飲食店の利用。義援金千円を明記」。方針が決まりました。さらに「米沢八湯で連携しよう」。新たな提案がありました。

「米沢八湯」。

それまで、言葉としては存在していました。姥湯温泉、大平温泉、小野川温泉、五色温泉、白布温泉、新高湯温泉、滑川温泉、湯の沢温泉。米沢市内の八つの温泉を指す言葉です。

しかし、温泉街と一軒宿では、経営形態が異なり、交流するきっかけもないまま、各自バラバラに活動してきました。

四月六日　米沢八湯で初の会議。八温泉連携と二泊五食プランを合意しました。

四月八日　ブログをオープン。米沢八湯初の広告。

米沢八湯として共通のパンフレットを初めて製作

四月十五日　設立総会。会の名称は、「温泉米沢八湯会」。県内の全テレビ局、新聞社三社が取材に訪れました。自粛ムードと観光不振が続くなか、県内の観光業界として最初の明るい話題となりました。

四月二十二日　初の共同プラン「絆の米沢八湯プラン」を発表。目玉は、先着2500（ふっこうおうえん）名の復興応援特典。館内利用特典二千円分と米沢の商品券千円分。商品券は、「復興応援券」と名づけました。温泉街や市内のラーメン店で使える「絆・お食事券」五百円分。

「内需拡大」発言から三週間、震災から約一カ月という異例のスピードで会を立ち上げ、プランを発表できました。

表紙には、尾形雄一さんデザインのロゴマーク

迅速な対応は、震災後の四月だからできました。あらゆるスケジュールが白紙、宿泊予約もキャンセル。一緒に動ける時間がありました。そして、全経営者にかつてない同一の危機感がありました。もし、ゴールデンウイークを過ぎていたら……、再び満室を経験していたら……、面倒な連携より自館の都合を優先し、温泉米沢八湯会は発足していなかったかもしれません。

二泊五食にこだわったワケ

「どうして二泊なの？」

震災後の需要がしぼむなか、あえて予約のハードルを上げたのには、三つの理由があり

ます。

第一に、震災を経験したお客さまの心の骨休めとして。

県内でも停電やガソリン不足、ご家族との音信不通など、不安な日々を過ごされた方が多くいらっしゃいます。お客さまに本当にゆったりしてほしい。一泊旅行は気軽ですが、食事やお風呂で慌ただしく、なかなかゆったりできません。本当のゆったり感は、丸一日休める連泊です。この機会に、改めてご家族やご友人と絆を深める時間をつくっていただきたい。私たちの思いでした。

第二には、地域とともに。

単に旅館に泊まるだけでは、宿でしかお金が動きません。二泊すれば、市内観光や昼食、買い物など、米沢全体の経済が活性化します。未曽有の国難を乗り越える時、温泉地の旅館だけが生き残っても意味がありません。観光施設や飲食店、お土産屋さんは、運命共同体なのです。プラン利用が、自動的に波及するよう腐心しました。

第三の理由は、宿の稼働率と価格の安定です。

震災後のキャンセルと自粛ムード。旅館は予約がなければ、休まざるを得ません。一週間で二日も三日も休みになりました。当然、従業員も休み、食材のロスも増えます。連泊利用により、宿の稼働率を少しでも高める狙いがありました。

また、価格の面でも県内の宿泊プランは、低価格化が極限状態でした。震災後の緊急事態とはいえ、県内には一泊三食千円という価格までありました。一泊のプランでは、どんなにお得でも値上げしたような印象しか与えないのではないか、という不安。そこで連泊や義援金、特典により異なる魅力を打ち出しました。

さまざまな思いの詰まった連泊プラン。米沢八湯の宿が動いていたところ、発表直前に米沢市から強力なバックアップをいただけることになりました。

自治体補助金利用の経済効果比較

（補助金総予算を100万円、宿泊代金を1万円とした場合）

方式	無料招待方式	半額負担方式	米沢八湯会モデル
内訳	宿泊者は全額無料 宿泊費1万円を補助金で	宿泊者は5,000円負担 宿泊費の半額を補助金で	宿泊者が10,000円負担 補助金を特典に充当
自治体補助額	1万円×100名 （100万円）	0.5万円×200名 （100万円）	0.25万円×400名 （100万円）
宿泊者負担合計	0円	0.5万円×200名 （100万円）	1万円×400名 （400万円）
1次経済効果 （宿泊施設）	100万円	200万円	1.1万円×400名 440万円
2次経済効果 （宿泊施設以外）	0円	0円	0.15万円×400名 （60万円）
経済効果 合計	**100万円**	**200万円**	**500万円**

行政のバックアップのあり方

何と米沢市では、緊急経済対策として補助金の準備を始めていました。

通常、補助金は行政があらかじめ枠組みを決め、民間企業を募り、補助を行います。

今回は、米沢八湯の声を取り入れ、プランに沿った補助にしていただきました。

プランを考える際、参考にしたモデルがあります。米沢で毎年発売される「愛の商品券」です。

「愛の商品券」とは、米沢市で使えるプレミアム商品券。発売すれば即日完売です。人気の秘密は、分かりやすいお得さ。一万円で一万一千円分の価値があり、千円もお得です。

かつて、行政の取り組みでは全額を負担するのが当たり前でした。例えば、百万円の予算があれば、百万円で何かをつくる。すると、百万円分、経済が動く。

ところが、愛の商品券では、百万円はお得な千円部分に充当します。すると、千円×千枚＝百万円ですから、千セットの愛の商品券が販売でき、一千百万円の経済を動かすことができます。使い道も米沢の商店連盟ですので、必ず地元で使われます。

私たちは、米沢市からの補助金を絆の米沢八湯プランの復興応援特典に充当し、同じような効果を得ようと考えました。

震災後、全国的な観光不振が起こり、さまざまな自治体が観光への補助をつくりました。

予算を百万円として実際にあった使い方を比較すると、別表のようになります。お分かりのとおり、同じ予算でも経済効果が全く変わってきます。

米沢八湯モデルでは、特典は宿のみならず、地元商店街や飲食店でも使われ、しかも連泊で滞在時間が倍です。温泉街全体、米沢全体への経済効果は確実に大きくなります。

とにかくつなげる！ さまざまな絆

米沢八湯のつながりは、さらなるつながりを生みました。

まず、行政とのつながり。前述の米沢市とともに、山形県、米沢商工会議所、米沢観光物産協会。

山形県は、「愛と義の心の絆プロジェクト」を立ち上げました。米沢市を含む置賜（おきたま）地域の温泉地との連携プランです。

米沢商工会議所では、米沢市商店街連盟のセールで景品として米沢八湯の宿泊券をプレゼント。旅館のプランでは、商店街の商品券を配り、商店街の景品に旅館の宿泊券が使われる。応援団のエール交換のようにお互いを助け合う取り組みが、米沢のなかで行われました。

米沢観光物産協会には、お客さまからの問い合わせ窓口を引き受けていただきました。総合案内の電話番号ができ、チラシ掲載が可能になりました。

さらに、被災者とのつながり。義援金以外にも被災者と宿泊者をつなげるため、「復興応援メッセージ」を募りました。プラン利用者に書いていただき、ブログに掲載しました（公式ブログ http://ameblo.jp/yonezawa8/）。

「やはり、大切なのは経済の活性。明日は、米沢牛を満喫します。福島でおみやげをいっぱい買います。東京でも東北産のものを買います」

ブログがきっかけで、思わぬオファーもいただきました。温泉米沢八湯会のロゴを無料でデザインしてくださるというのです。デザインした尾形雄一さんは、米沢出身でした。

つながれば、新たな「核」に

六月十二日、白布温泉で開湯７００年祭が執り行われました。白布温泉には、百年ごとに一体のお地蔵様を奉納する習わしがあります。今年、源泉を見守る七体目のお地蔵様が並びました。

地震、津波も自然ですが、温泉もまた自然です。温泉旅館は、温泉がなければ生きていけません。私は、どこの温泉地、観光地にも「核」があると思います。米沢の温泉なら、山や川、温泉や歴史が核。その核に、衣食住や買い物の機能を持つ旅館や商店、飲食店が集まり、温泉街を形成する。以前は、個々のお店が頑張れば、何とかなりました。または、温泉街の魅力を磨けば、成功できました。しかし、震災後はいかにつながって、より広い地域としての魅力をつくれるかだと思います。つながることで新たな核が生まれ、違った魅力を生むきっかけになります。

お祭りやイベントなどの時間的な魅力、景観という空間的な魅力。今まで行政に任せっきりだった部分も民間主導で見直してみる。今回、米沢八湯という新たな「核」ができました。そして、行政の皆さまとも新たな連携

設立総会後の記念撮影。多くのマスコミに報道されました

ができました。今までなかった魅力を生み出せる大きなテコを手に入れたといえます。

魅力をつくるのは、誰か？

「貴温泉地の魅力を発信できます！」

インターネットのおかげで簡単に情報発信ができるようになりました。しかし、伝えるべき魅力をつくるのは、いったい誰でしょう。

地元に責任がある。当然です。温泉旅館、商店など温泉街や温泉地を構成する人々。彼らが頑張らなければならないのは言うまでもありません。

行政の力も大きいです。今回学んだのは、行政に丸投げして任せっきりではダメ、かといって、どうせ何もしてくれないと諦めてもダメということ。まず、自分たちが動く。そのうえで行政とともに考えれば、魅力づくりの光明が見えてきます。

さらに、観光地に大きく影響を与える人々は、どうでしょう。リアルエージェント、ネットエージェント。旅行会社の考え方もまた、温泉地に大きな影響を与えます。

近年、短期利益の極大化が顕著です。本来業界をリードすべき大手企業が、短期の結果ばかりを追い求める風潮。

温泉にとって、百年先を見て考えるのは、当たり前です。この温泉時間とも言うべき時間の捉え方、長い目での活動が改めて問われているように思えます。

事に当たる人々

「被災して大変ですね」

優しいお言葉をいただくことがあります。しかし、私たちは被災していません。

今回、本当に大変な被災をされた皆さまには心よりお見舞い申し上げます。ただ、軽微でも被害者のように振る舞う方もいらっしゃいます。誤解を恐れずに言えば、被害者も加害者もないと思います。今の日本においては、全員が当事者。だから、みんなで事に当たるべきです。

国難を自分のことと受け止め、行動につなげる。例えば、旅館だけの狭い視野で考えがちな宿泊プランも作り方次第で、他の温泉、行政、商店街、飲食店、被災地とつながることができます。絆が生まれ、可能性が広がります。

東北には、たくさんの温泉があります。温泉発「絆」の魅力づくりが、地域の独自性の再発見、ひいては復興への原動力になるよう願っています。

（えんどう　なおと）

特集 4

地域に守られ飲み手に支えられる日本酒の文化

――地産多消から地産地消を目指して

清酒「蒼天伝」醸造元　株式会社男山本店
代表取締役　菅原　昭彦

地域の自然と農業が一体となってできる酒米（契約栽培田）

弊社の創業は一九一二年（大正元年）、来年で百年を迎えます。

創業当時に京都府八幡市の石清水八幡宮（別名・男山八幡宮）への製造免許を受けた御礼祈願の折、八幡宮宮司より拝受した「伏見男山」という銘柄をメーンに販売をしてきました。震災前の出荷割合は地元が八割、地元外が二割という状況で、地元での販売を中心に行ってきた地酒蔵です。

地酒の魅力

わが国の美称を「豊葦原の瑞穂国」と呼んできたように、日本の農業は水と米を大切に守り、その水と米は日本人の社会的・文化的そして思想の基本となってきた、まさに日本人の原点とも言えると思います。

わが日本酒も、深く見つめ直していくと〝いかに自然と調和して生かされていくか〟という日本民族の自然観に到達し、先人の知恵の深さに驚かされると同時に、農業との密接な関係が浮かび上がってきます。そして私どもの酒造りも地域の自然や農業と一体となっての取り組みを行ってきました。

また、一方で気仙沼は漁業とともに発達してきたまちです。生鮮カツオの水揚げは日本一、カジキ類の水揚げ日本一、ふかひれに至っては世界一の生産量を誇る港町です。小魚や貝類から大型魚まで、水揚げされる魚種が豊富なことも気仙沼港の特徴です。

とかく日本人は諸外国からは海の資源を荒らす民族だと誤解されていますが、いろいろ調べると、実は日本人ほど海とうまく向き合って生きてきた民族はないのではないかと思っています。食べる時も骨、皮、内臓まで余すところなくきちんと食べるし、これ以上獲ったら明日明後日の漁が無くなると思え

ば、漁師は必ず幼魚は逃がすなど日々の営みのなかで資源保護を実践してきたのです。

地酒とはそもそも、その土地の米を使い、その土地の水で仕込み、その土地の気候風土で醸され、その土地の人や食べ物に鍛えられて初めて地酒たりうるものだと思います。

そして、お酒を通して日本人の自然観や地域の文化・食文化を守り発信していくことが、私たち地酒蔵の大きな使命の一つという信念を持って酒造りを行ってきました。

震災の被害

三月十一日は気仙沼港の沿岸にある、国の登録有形文化財にも指定され気仙沼のランドマーク的な建物だった木造コンクリート三階建ての本社屋の中にいました。地震直後、津波が来る前に本社から三百メートルほど離れた高台にある酒蔵に避難し、社員の無事を確認した後さらに高いところに全員で避難をしました。地震・津波・火災とその日は身を守るのが精いっぱいで、酒造りのことを考える余裕はほとんどありませんでした。翌日、一緒に避難をした社員と蔵を確認しに行くと、幸いなことに津波は酒蔵の門柱の少し手前で止まり、築百年の酒蔵は地震の被害もあまり受けず発酵途中の醪（もろみ）や貯蔵中の製品はほとんど無傷で残っていました。

ほっとする一方で会社としての被害は甚大で、まず、本社屋が倒壊し本社機能（パソコンやデータ、書類や記録等）と直売の小売店舗を失い、併せて少し離れた地区にあった資材倉庫（びん、レッテル、箱、段ボール等を保管してあった倉庫）が全壊流失し跡形もな

国の登録有形文化財指定「男山本店」本社（震災前）

三階部分が残った「男山本店」本社（震災後）

壊滅的な被害を受けた気仙沼市街

くなっていました。しかし、一番大きな被害は市内の多くの地域が被災し、私どもの取引先である酒販店さんやスーパー、ホテル、飲食店さんが壊滅的な被害を受けられたことです。前段でも書きましたが、弊社の取引先の多くは地元です。そのうち八割強が被災されたので、単純計算しても売り上げの七割を失ってしまったことになります。

長年地域とともに歩み、地域のなかで育てられてきた地酒。観光で来られた方に地元の食材と一緒に楽しく飲まれていた地酒。地域の被害の大きさを知るにつれ、地域の産業が破壊され観光需要も数年は期待できない状況を目の当たりにして、この先どうなっていくかという不安が頭をよぎり言いようのない怖さに包まれました。が、とにかく生き残った醪と酒を放っておくわけにもいかず、翌日からすぐに仕事モードに入りました。

できることからやるべきことへ

できることから始めようと考え、まず家族の安否や自宅の状況が気になる地元の社員を家に帰し、花巻から来ている杜氏（とうじ）とアパートの全壊を確認できた蔵人一人と私の三人で醪を管理することにしました。醪は温度管理が全てです。とはいっても冷水機を使って冷やし、分析器を使用し発酵を管理するのが本来のやり方ですが、電気や水道といったライフラインがストップしているなかでできることは限られました。昔使用していた筒に非常用にとってあった氷を詰めて中から冷やし、電池式の温度計を使って発酵を管理するというやり方です。しかし、この方法にも限界があり、震災一週間後には杜氏から「あと二、三日後には搾りを始めなければならない状況だ」と告げられ、何とか搾り機を動かす電気（動力）と洗浄に使用する水を確保してほしいと要請されました。何せ周りはがれきの山、一般の家庭にも電気や水道は通っておらず、一向に復旧するめどが立っていません。発酵は待ったなしに進んでいきます。そこで、何か方法はないものかと思いを巡らせながらまちを歩いていると、知り合いの福祉施設に非常用の大型発電機があることが分かりました。無理を承知で聞いてみると、この施設では電気が復旧していて発電機を貸してもいいと言われました。発電機を稼働させるための燃料の軽油も友人が「何とかしてやるから心配するな」と提供を約束してくれました。さらに二トン余りの発電機を運ぶためのクレーン車を出してくれる人が現れ、配線も避難所にいる知り合いの電気工事屋さんが材料や工具も満足なものがないなかでやってくれました。水は仕込み水（水源は酒蔵から五キロほど離れた場所で被災を免れていました）をトラックでくみに行くことで手当てをし、無事に醪を搾ることができました。

心を込めて吟醸仕込み

搾るに当たっては自分のなかでかなり葛藤がありました。まちには電気も水道も通っておらず、また行方不明の方や避難所での不便な生活を強いられている方が多数いるなかで、電気と水を大量に使って搾るわけです。こん

なことをしていていいのだろうかと。

しかし、その時協力してくれた全員が同じ言葉をかけてくれました。「残された気仙沼の生産物を絶やすな」「復興の先駆けになってほしい」。自らも被災しながらも、たかが酒を搾るために力を貸してくれた人たちのこの言葉に勇気づけられ決断をしました。

私はできることから始めたつもりでしたが、この時から酒蔵として、そして地域に残った数少ない生産設備としてやるべきこと、つまり生き残った企業としての使命に変わっていきました。

全国からの応援

やっと全てのお酒が完成したものの地域の状況は全く変わっていません。むしろ少しずつ自分の行動範囲が広がるにつれて、目の前に広がる光景は信じられないものでした。

美しいふるさと気仙沼は見るも無残に破壊され、みんなが言っていたとおり水産加工を中心とした市内の生産設備は壊滅的な打撃を受けていました。また、蔵の中でも無事お酒を搾ることができたものの電気と水道は復旧しておらず、まさに綱渡りの操業を続けていました。そのようななかで期せずして多くのマスコミの方が次々と取材にやってきて状況は一転します。電気が復旧するやいなや電話は鳴りっぱなし、それまで開けなかったメールは五百通にも上っていました。皆、マスコミの報道を見て市場を失った酒蔵に対して応援をしたいという問い合わせや注文でした。北は北海道から南は沖縄まで、「自分は日本酒が好きだから飲むことで応援したい」「地元が復興するまで代わりの売り先になりたい」という励ましのメールや手紙などを添えて注文をくださった方たちが多く、石垣島から注文をくださった方などは二千円の商品を買うのに四千円の送料を払ってまで買ってくれました。本当に感動し勇気づけられました。

がれきが押し寄せた酒蔵の周辺

また、ボランティアや取材・研究のために気仙沼に入ってこられた方々が、応援のために私どものお酒を購入していかれるケースも多数ありました。本来は飲食店で飲んでお金を落として帰りたかった皆さんですが、前述のとおり飲食店や宿泊施設も相当ダメージを受けており、飲んで帰れる状況ではありませんでした。酒蔵に来て、ある人は気仙沼に思いをはせながら、またある人は縁があって気仙沼に来た記念にという感じです。

震災を経て改めて考えさせられたこと

震災後、実に多くの方に応援をいただき、まだまだ不自由なことが多い毎日ですが何とか前に進んでいます。これらの体験を通して実に多くのことを考えさせられましたが、ここではポイントを二つに絞ってお話ししたいと思います。

一つ目は、酒蔵と地域との関係です。

普段から「地酒はその土地の風土の産物だ」とか「地域とともにあってこそ地酒だ」など

と言っていましたが、今回地域の多くの人たちが酒蔵を応援してくれました。地元の生産設備が壊滅的な打撃を受けているなかで、何とか「気仙沼」の名を発信し続けてほしいという気持ちを込めて応援してくれたと思っています。つい最近も工場・自宅を失った経営者から「まず走り続けてくださいね。俺たちもそのうち走り出せるよう頑張りますから」と声をかけられました。心強い限りです。今まで感じたこともないような地域との結びつきを感じることができたと思っていますし、気仙沼を発信し続けるという新たな使命が生まれたと感じています。

地元の人々と全国の飲み手のために吟醸仕込み

二つ目は、酒蔵と飲み手の関係です。

これも普段から「飲んでくださる人においしいお酒を提供するんだ」「そのために品質の向上を図るんだ」という使命感を持って仕事をしてきたつもりです。それでも、今回たくさんの手紙やメールをいただき、そのなかには私たちの見えないところで私たちのお酒を楽しみにしている人たちが数多くいて、お酒を通してこんなにも多くの人とつながっていたということを改めて感じさせられました。飲み手の顔が見えなかったのが、何となくイメージできるようになったということでしょうか。そういう人たちのためにも、いち早く本格的な復興を成し遂げて、改めて高品質でおいしいお酒を提供していこうという気持ちでいっぱいです。

地元で普通に味わえる日まで

現在の気仙沼は復興というにはまだ早い状況です。しかし、地域に守られた酒蔵である以上、復興を果たす日まで守り通していかなければならないと思っています。

地域の人々に支えられての米作り・酒造り

もうすぐ、新しい酒造りが始まります。私たちは、一日も早く地元の人たちが笑顔で当たり前のように地元のお酒を楽しめる環境を取り戻すために、そしてよそから来た人たちが気仙沼の食材に合わせておいしく飲めるように、生き残った酒蔵として頑張っていきたいと思っています。

（すがわら　あきひこ）

研究ノート

三陸の観光復興
――岩手県田野畑村の取り組み

財団法人日本交通公社　主任研究員
大隅　一志

陸中海岸国立公園を代表する景勝地・北山崎（**写真1**）を有し、海の暮らし資源を生かした体験型観光の先進地であった岩手県田野畑村は、東日本大震災により甚大な被害を受けながらも、いち早く村の復興、観光復興に動き始めた。当財団も、今年度、観光振興に長年協力してきた同村の観光復興への支援を行っている。

他の被災地域に先駆けて観光復興に取り組む同村への支援を通して、観光復興に必要なプロセスや手法、震災復興における観光の役割、復興支援のあり方などを考察し、記録として残しておくこととしたい。

田野畑村と東日本大震災

田野畑村（http://www.vill.tanohata.iwate.jp/）は岩手県沿岸北部に位置する面積一五六平方キロメートル、人口約三千九百人の小村である。主産業は、ワカメやコンブの養殖、定置網によるサケ漁などの近海漁業、夏場の冷涼な気候を生かした酪農、および観光である。

田野畑村の観光は、沿岸部を舞台に、北山崎観光と体験型観光を両輪としてきた。近年は、立ち寄り・通過型である北山崎依存の観光から滞在型の観光への転換を図るべく、二〇〇二年度に『体験村・たのはた』推進プラン」を策定。以降、漁村を舞台として、〝地域の暮らしを、

写真1　北山崎の日本一の海岸景観は震災後も変わっていない
（写真提供：田野畑村）

地域の人が、観光客に伝える〝という『番屋エコツーリズム』（http://www.tanohata-taiken.jp/）をコンセプトに、さまざまなガイドプログラムの開発、地元ガイド人材の育成、コーディネート組織（NPO法人体験村・たのはたネットワーク）の設立などの基盤づくりを進めてきた。「サッパ船アドベンチャーズ」「番屋ガイド」「ネイチャートレッキング」などの特徴的なプログラムも定着し、滞在型観光への基礎固めがようやくできたところであった。

二〇一一年三月十一日に発生した東日本大震災では、沿岸部漁村集落の大半が津波で流失した。観光面においては、拠点宿泊施設（ホテル羅賀荘）**（写真2）**が被災し、民宿の大半が流出するなど宿泊収容力は五分の一に減少、「机浜番屋群」**（写真3、4）**やサッパ船**（注1）**が流失、三陸鉄道島越駅および高架橋が流出するなど、村がこの十年をかけて築き上げてきた番屋エコツーリズムとその舞台のほとんどが失われた。救いは、北山崎などの海岸資源に影響がなかったこと**（写真1）**と、観光関係者に人的被害がなかったことである。

三陸の被災地の中で、田野畑村の復旧・復興への動きは速い。役場組織としては、二〇一一年度、震災からの復興を重点に復興対策室と水産復興室を新設。被災地のがれき撤去や仮設住宅建設は、六月末にはほぼ終了している。四月下旬には「東日本大震災田野畑村災害復興計画策定委員会」を立ち上げ、七月下旬には村復興計画の素案が住民に説明された。

写真2 被災直後の「ホテル羅賀荘」
（写真提供：田野畑村）

写真3 番屋エコツーリズムの象徴であった「机浜番屋群」
（写真提供：田野畑村）

写真4「机浜番屋群」被災後の状況

財団としての田野畑村観光復興支援の概要・視点

当財団の田野畑村観光復興に対する支援の内容は、村の災害復興計画策定委員会への参画と観光復興計画の策定、および観光復興に関する取り組みへの協力である。

前者については、筆者が委員として参画し、観光復興に関する計画提案や復興計画全般への提言を行うとともに、チームとして観光復興計画を策定するものである。また後者は、新たな観光を支える体験プログラムの開発や、今後の観光を考える上で基礎資料となる震災後の来訪者動向の把握などを行うもので、村の観光を途切れさせることなく、現実的かつ将来に向けた観光を育てていくため、地域関係者と協働で実施している。

田野畑村の観光復興への支援にあたっては、以下のような視点を意識しながら取り組みを進めている。

【視点1】観光復興の方向とそのプロセス・手法

◎震災を糧とした新しい田野畑（三陸）のツーリズムとはどういうものか？

◎今後の田野畑村、三陸観光のマーケットはどう変わっていくか、どう新たな需要を創出し

ていくか？

◎宿泊施設の大半が失われたなかで、宿泊施設をどう再生していくか？

【視点2】被災地復興における観光の役割・観光の生かし方

◎村復興計画の策定の中で、観光はどのような役割を果たし得るか？

◎観光の舞台として、魅力ある沿岸風景をどう再創出していくか？

◎被災集落の再建やコミュニティの再生において観光はどのような役割を果たせるか？

◎水産業等の振興・地域振興に向けた観光との効果的な連携のあり方とは？

【視点3】被災地・観光地支援のあり方

◎外部ネットワークの生かし方、地域協働のあり方とは？

◎観光復興支援の効果的・具体的な手法とは？

◎支援の窓口・プロセス管理のあり方とは？

復興への取り組みの現場から

震災から約半年が経過した。本格復旧はまだこれからの段階ではあるが、前述した視点に立って、現在の田野畑村の観光復興に関連する取り組みの一部を紹介したい。

●災害復興計画の策定～描くのは「未来に向けた復興」

震災から一カ月半後の四月二十八日、「東日本大震災田野畑村災害復興計画策定委員会」（委員長・廣田純一岩手大学教授、委員八人）が立ち上げられた。メンバーは、集落・コミュニティ、防災、福祉、水産業、観光などの各分野の専門家で、村と協働で、復興へのビジョンづくりや各種計画の横断的な検討・協議を行っている。個別計画の具体的な策定作業は、各委員が加わった「集落再建・コミュニティ再生」「福祉計画」「水産業復興計画」および「観光復興計画」の専門チームで進めている。

未来へ向けた復興の方針

村復興計画の策定にあたり、村および委員会では、「未来に向けた復興」を方針に掲げている。原状復旧にとどまらず、被災地を含めさらに魅力ある村に生まれ変わることを目指そうというものである。それを実現するためには、防災、生活再建、産業振興などの課題を個別に検討するのではなく、さまざまな分野が連携しながら創造的な解決策・具体策を見つけ出し、実行可能な計画に落とし込んでいくことが必要である。これまでに重ねてきた委員会では、回を追うごとに委員同士の意志疎通が図られ、発展的な議論がなされている。

観光――復興に推進力を持たせる役割

被災地の再建計画は、多分に現実的な対応を余儀なくされる。その中で観光は、「未来に向けた復興」に対する創造的な方策を検討し、復興に推進力を持たせる上で大きな役割を果たし得るように思われる。例えば、漁業と観光の連携から新たな「海業（うみぎょう）（注2）」を育てていく、復興支援を都市住民との交流プログラムとして生かしながら漁師番屋の再生や高齢者の多いコミュニティ再生に役立てていく、などなど。

観光への取り組みは復旧してからでは遅く、むしろ出番は計画段階にある〝今〟であり、少しでも早い段階で観光の視点から各計画への提案・アプローチを行っていくことが重要と考えている。

●再開を果たした「サッパ船アドベンチャーズ」

『番屋エコツーリズム』の中核プログラムである「サッパ船アドベンチャーズ」（図1）は、サッパ船八隻のうち六隻を津波で失い、実施できない状況にあったが、七月二十九日に見事再開を果たした。短期間で再開にこぎ着けることができた背景として、主に以下の二つの理由が挙げられる。

一つには、失われた漁船の早期調達にNPO（体験村・たのはたネットワーク）メンバーが迅速に動いたこと。震災後間もない段階で、

写真5「サッパ船アドベンチャーズ」再開後のツアーの様子。船長のガイドにも熱が込もる

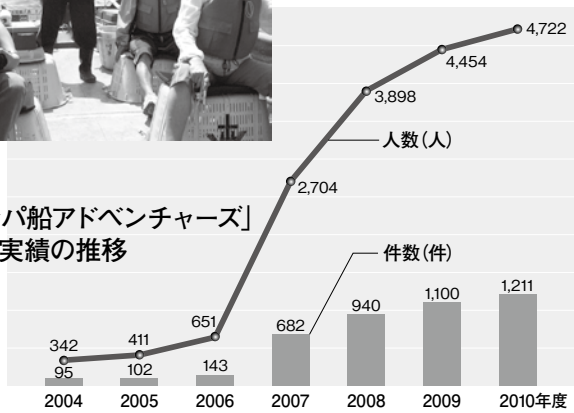


図1「サッパ船アドベンチャーズ」体験実績の推移

「サッパ船アドベンチャーズ」のパンフレット

NPOメンバーの一人が調達に奔走し、青森県下北の岩屋漁協の仲介で中古船五隻を調達。また残り一隻は漁協から村が購入・提供を受け、津波で失った六隻すべての調達にこぎ着けたのである。ちなみに、サッパ船購入の仲介役となった岩屋漁協の代表者は、震災のわずか二カ月前の一月上旬、田野畑村の机浜番屋群を会場とした子ども農山漁村交流プロジェクトの研修会に参加された方であった。

二つ目は、NPOのメンバーやガイド役となる船長たちが、再開への意欲を失わなかったこと。漁に出られないなかで当面の現金収入を得る手段であるという現実的な理由はあるものの、観光客にその海を案内するガイドという仕事に生きがいや誇りを感じていたこと、そして何より、〝慣れ親しんだ海に早く戻りたい〟という、津波を経験してもなお変わらない漁師の海への強い想いがあるようだ。

再開したばかりのサッパ船を体験

八月上旬に体験したプログラムでは、北山崎の断崖絶壁の迫力を間近に楽しむことに加え、現在見学できないコンブの養殖現場などの代わりに、写真などを用いながら、今回の津波に関する案内を加えたものとなっていた。サッパ船の船長（写真5）の中には、船を守るため沖に逃げて一夜を明かし、帰還した体験を持つ漁師もいる。津波により起きたことを海から見ること、さらに漁師の津波体験を通した、厳しい自然と海の暮らしについての解説は、プログラムにこれまで以上の深みと説得力を与えている。

当財団としては、まだ荒削りなこのプログラムにさらに磨きをかけ、テーマや客層に応じた解説のバリエーションを増やしていくべく、今後も支援をしていきたい。

田野畑村の元気度を内外に発信

今回のサッパ船再開は、県内外のメディアの取材を受け、全国的にも三陸復興への明るいニュースとして報道された。報道以降、サッパ船利用者が大幅に増えつつあり、メディアを活用した情報発信の効果は大きい。同時に、被災地域の復興を考える時、観光が提供する明るい話題は、被災地域が復興に向かう元気な姿を内外に発信するという重要な役割を持っているのではないだろうか。

（おおすみ　かずし）

（注1）陸中海岸の漁師がウニ漁やアワビ漁、その他、小規模な刺し網漁などに使用する、〝笹の葉のように小さな舟〟を意味する小型漁船。

（注2）海業：漁業生産だけでなく、ブルーツーリズムや体験学習、地産地消など多様化する国民の海・漁業・漁村へのニーズに応える漁村地域の新しい「なりわい」。東京海洋大学・婁小波教授は、海や地域文化伝統、地域景観などの地域資源をフルに使って展開される漁村地域の人々の新たな生業をトータルに捉えた「海業」を提唱している。

特別寄稿

観光統計をより科学的に捉える

――観光統計を活用した実証分析に関する論文表彰と募集

国土交通省観光庁参事官室（観光経済担当）

観光庁では、次世代を担う観光政策の研究者・実務者の研究を奨励するとともに、観光施策の企画・立案および成果検証における観光統計の積極的な活用を促進することを目的として、「観光統計を活用した実証分析に関する論文」の募集を二〇〇九年度から毎年行っている。

今年度の論文募集

【募集概要】

◎募集期間：二〇一一年七月二十九日（金）～二〇一一年十一月十八日（金）

◎応募資格：個人、グループ、研究機関および国籍は問わない

◎応募規定：

①論文は未発表のもので、著作権に関し問題のないものに限る

②提出物：論文（A4判十枚以上十五枚以下）および要約（A4判一枚以内）

◎審査・発表：

①有識者による審査委員会を設置し、審査のうえ優秀な論文を決定

②審査結果は二〇一二年二月ころに通知するとともに、表彰状を贈呈

＊昨年度の受賞論文および今年度の募集要項など詳しくは観光庁ホームページに掲載
http://www.mlit.go.jp/kankocho/siryou/toukei/ronbun.html

昨年度（二〇一〇年度）の入賞論文

第二回目となった昨年度は、大学関係者（教授、准教授、学生など）やシンクタンクの研究員などから十七編の応募があった。観光旅行に関する市場・産業分析や消費行動分析、観光振興施策の効果分析等を行った専門的な論文を対象とし、国、地方公共団体、観光事業者・関係団体等における観光に関する諸活動への貢献が顕著であると認められるものについて、観光庁長官賞一編と審査委員会奨励賞二編を選定した。

昨年度の受賞論文は**表1**の通り。

二〇一〇年度の受賞論文概要

昨年度長官賞を受賞した論文「宿泊旅行統計を活用した観光施策評価手法の適用可能性に関する分析～ソフト施策を対象としたケーススタディ～」の中では、「宿泊旅行統計調査」を活用し、各都道府県がどのようなタイプの宿泊施設に特化しているのかを分析している。

例えば、沖縄県や千葉県は観光特性が観光地型、施設形態がホテル型であることから、「リゾート型」の性格が強いとしているし、東京都や大阪府は観光特性が都市型であり、施設形

表1 2010年度の受賞論文概要

	観光庁長官賞（1編）	審査委員会奨励賞（2編）	
主題	宿泊旅行統計を活用した観光施策評価手法の適用可能性に関する分析 ～ソフト施策を対象としたケーススタディ～	都道府県間流動データによる国内宿泊旅行圏の設定と休暇分散効果の検証	国際観光テーマ地区の外客誘致パフォーマンス ～DEAによる計測とその評価～
受賞者	地域観光マネジメントグループ （グループ応募：3名） 平井 健二：吉野 大介 復建調査設計株式会社 小池 淳司 鳥取大学大学院工学研究科准教授	矢部 直人 首都大学東京 都市環境学部 自然・文化ツーリズムコース 助教	平井 貴幸 東京国際大学大学院経済学研究科博士後期課程
内容	包絡分析法（DEA：Data Envelopment Analysis）を用いて、都道府県の観光特性や施策実施状況等を踏まえ、観光施策を相対分析し、施策の評価方法論および改善案を提案した研究。評価が曖昧になりがちな観光施策に関し、どのような地域にどのような施策を展開すべきかということを定量的に示している。	都道府県間宿泊旅行流動データに対して、グラフ・クラスタリング手法を用い、旅行圏の設定と休暇分散効果の検討を行った研究。従来、時間的な需要の分散化効果を中心に検討されてきた休暇分散化に関し、空間的効果の視点から検討を試みている。	包絡分析法（DEA：Data Envelopment Analysis）を用いて、訪日外客誘致の効果を相対的に評価する方法に関する研究であり、効率性の評価方法の提案をしている。訪日外客誘致効果と訪日外国人客数の関係、各地区にとって重要度の高い外国人の国籍を定量的に検証している。

態に関しては顕著な特徴が見られないことから、「都市滞在型」の性格が強く、シティホテルやビジネスホテルの集客力が強い都道府県であると分析している。またこの他にも「観光旅館型」や「バランス型」に分類している。

さらに、「旅館」や「リゾートホテル」「シティホテル」などの宿泊施設別、都道府県別に宿泊者誘致の効率性について分析し、宿泊客の誘致策について示している。

◆◆◆

このように観光統計を用いて、また他の統計などと合わせて分析することで、客観的に地域の現状や特性を見ることができる。

観光統計が観光振興に向けた取り組みの基盤としての役割を果たすためには、多くの研究者や実務者などに活用され、その分析結果を基に観光振興施策が実施されていくことが重要である。

観光統計の整備

観光庁では、観光立国の実現のため、また各地の観光振興の基礎となる統計の整備を進めている。

現在の観光統計の整備状況の概要は、以下の通りである。

●宿泊旅行統計調査

我が国の宿泊旅行の実態を明らかにするため、従業者数十人以上の全国の宿泊施設を対象として二〇〇七年より調査を実施。

二〇一〇年度より従業者数十人未満の施設に対しても調査範囲を拡充した。

●旅行・観光消費動向調査

我が国における旅行・観光消費額を把握することで、旅行・観光の経済波及効果の推計や分析などに資することを目的に、日本国民を対象として二〇〇三年度より調査を実施。

二〇一〇年度より調査対象者数や調査項目を拡充した。

●訪日外国人消費動向調査

訪日外国人の旅行消費動向を的確に把握するため、訪日外国人を対象として二〇一〇年度より調査を実施。

全国十一の空海港で国籍・性別・年齢などのほか、訪日回数や品目別の消費額などを調査。

●都道府県観光入込客統計

これまでは、各都道府県における観光入込客統計の手法が異なっていたため、比較が困難であった。このため都道府県関係者、有識者との連携のもと、観光入込客数と観光消費額単価、観光消費額（総額）を測定する「共通基準」を策定し、二〇一〇年より各都道府

県にて順次導入した。

これにより各都道府県における実態を同じ物差しで測ることが可能となった。

●観光地域経済調査

（旧観光産業構造基本調査）

観光産業の基本構造（事業者数、売り上げ規模、雇用・就労状況等）を把握するための調査手法を予備的調査により検証。

①観光産業の〝規模〟を示すデータ→観光産業の事業所数を調査

②観光の〝重要性〟を示すデータ→売り上げに占める観光比率を調査

③観光産業の〝波及効果〟を示すデータ→観光産業の域内調達率を調査

これらにより観光需要によってもたらされる定量的な経済効果を把握。

観光の経済効果

二〇〇七年一月、観光立国推進基本法が施行され、観光は二一世紀における日本の重要な柱として初めて明確に位置づけられた。多くの自治体等では、観光を通して地域を活性化させようとさまざまな取り組みを展開するなど、観光には大きな期待が寄せられている。

◆　◆　◆

ではその観光の状況はどうか。「旅行・観光産業の経済効果に関する調査研究」によると、二〇〇九年の日本の国内観光消費額は二五・五兆円と推計され、我が国の経済にもたらす直接的な経済効果は、直接の付加価値誘発効果が一二・三兆円（GDPの二・六％）、雇用誘発効果が二百五十一万人（全雇用の四・〇％）、税収効果が二・〇兆円（全税収の二・六％）と推計される。

また、国内観光消費額二五・五兆円のうち六八・〇％を占めるのが日本人の国内宿泊旅行（消費額は一七・四兆円）であり、日本の観光はまだまだ日本人の国内宿泊旅行に頼るところが大きい。（**図1、図2**　観光庁「旅行・観光産業の経済効果に関する調査研究」より）。

東北地方の観光

東日本大震災から半年が過ぎ、被災者の生活再建に直結する生活インフラや社会インフラの復旧や整備は優先的に実施されてきたであろうが、一方で地域の総合的な復興計画やまちづくり計画は、地域の人々の思いや、地域の目指す将来像を描いてからの実行となるため、まだ時間がかかるだろう。

しかし観光は、社会インフラがある程度復旧すれば、比較的早期に事業を再開でき、地域経済の復興に少なからず貢献できる。

そういった意味においては、震災後少し経ってから、復興の一助になればと東北地方を訪れた方もいるだろう。

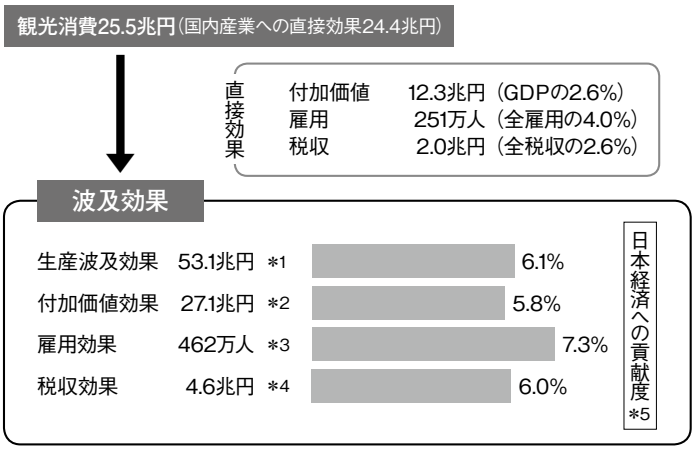
◆　◆　◆

ここで昨年（二〇一〇年）の東北地方の観光の状況を宿泊旅行統計から見てみる。東北地方に宿泊している人は、半数の五〇・一％が東北地方居住者で、次いで関東地方居住者が三三・四％となっており、東北地方の宿泊旅行については、東北地方域内の旅行者と関東地方からの旅行者で八割以上を占めている（**図3**、観光庁「宿泊旅行統計調査」より）。

このように、宿泊旅行について見た場合、東北地方における宿泊旅行需要は東北地方居住者がその大半を担う構造となっているが、今年は震災の影響により東北地方居住者による旅行需要は減退するであろうから、観光による地域経済の復興・活性化には、外国人客を含め、東北地方以外の地域から東北を訪れ、地元経済に貢献することが重要となってくる。

積極的に休暇を取って、家族や友人たちと東北地方へ旅行に出かけて、そこでのさまざまな活動を楽しむことも、復興の手助けとなるだろう。

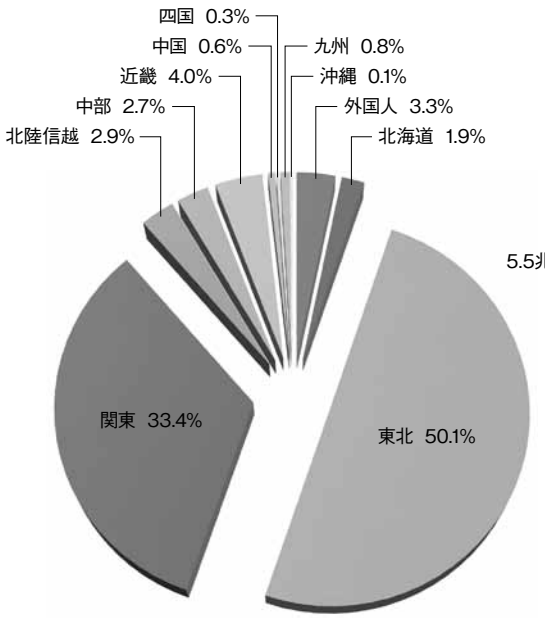
図1 観光消費が我が国にもたらす経済波及効果（2009年）



*1：国民経済計算における産出額 874.3兆円に対応
*2：国民経済計算における名目GDP 470.9兆円に対応
*3：国民経済計算における就職者数 6,328万人に対応
*4：国税+地方税 76.4兆円に対応
*5：ここでいう貢献度とは全産業に占める比率

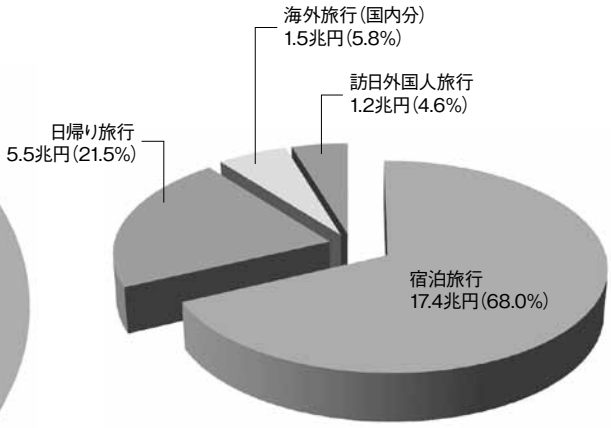
観光庁「旅行・観光産業の経済効果に関する調査研究」（2009）より

図3 東北地方への宿泊旅行者の居住地別割合



観光庁「宿泊旅行統計調査」（2010年暫定値）より作成

図2 国内観光消費額25.5兆円の市場別規模（2009年）



観光庁「旅行・観光産業の経済効果に関する調査研究」（2009）より

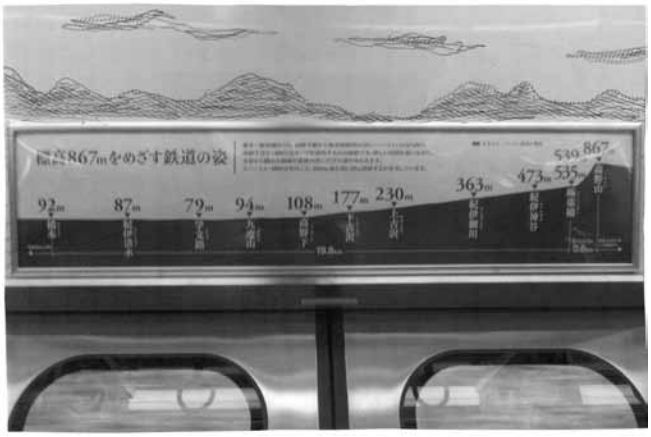
連載Ⅰ
あの町この町
第45回

聖と俗――和歌山県高野町

ドイツ文学者・エッセイスト
池内　紀
（イラスト＝著者）

南海鉄道の大阪なんば発快速で橋本。乗り換えたとたん、ガラリと車内の雰囲気が変わった。ごく通常の郊外電車だったのが、急にハナやいだ空気になった。通勤客が乗り降りして、経済紙やスポーツ新聞がひろげたりたたまれたりする乗り物ではない。

ドアの上にイラストつき「こうや花鉄道沿線マップ」が掲げてある。「花」の字が四つの花ビラにデザインしてあって、赤い四つの唇のようだ。学文路79m、九度山94m、高野下108m。駅名に標高がそえてある。下古沢177m、上古沢230m、紀伊細川363m、紀伊神谷473m、終点の極楽橋は539m／535m。終点でケーブルカーに乗り換えるわけだが、乗り場の上と下で4メートルの差があるので標高が二つ示してある。マップをつくった人のユーモア感覚がほほえましい。つづいて図解のカーブが急角度になって、ケーブルの高野山駅は867m。



こうや花鉄道沿線マップ

和歌山県伊都郡高野町は全国の自治体の中でも、めだった特徴をもっている。面積一三六平方キロと大きいのに、四六〇〇あまりの住人の大半が千メートルにちかい高地に住んでいる。さらに山裾にちらばる二〇あまりの集落のおおかたが、お山へのびる道沿いにある。いかに町全体が一つの目的にそって生まれたかがうかがえる。高野山金剛峯寺、いうまでもなく空海さん、弘法大師の開基になる霊所であって、真言宗総本山として末寺の数が三六〇〇有余。

そのかぎりでは宗教都市におなじみのことだが、ふつうは霊域が山上に点在していて、門前町は山裾、あるいは中腹にかけて細長くのびていく。これに対して高野山は寺と町とが丸ごと山上にあって、下界とは温度差が十度ばかり。うだるような夏に、下の集落から上の町役場へやってきた人は言うにちが

いない。

「こちらはクーラーがいりませんね」

僧空海が高野山に行き着いたことについては、有名な伝説がある。中国留学からもどるにあたり、密教信仰の聖地を誓願して「三鈷杵」という法具を浜から投げたところ、それは東の空に飛び去った。帰朝後、紀ノ川のほとりで身の丈八尺もある狩人と出くわした。狩人のいうには、近くに瑞光を放つ山がある。白黒二匹の犬に案内されて山に分け入ると、松の枝に三鈷杵がのって光を放っている。空海はその地に伽藍を建立することにした――。

もとより伝説にすぎないが、多少は事実を踏まえているのかもしれない。全国いたるところに弘法説話があるほど修行の旅をした人であって、数多くの山を見てきた。自分が求める条件にぴったりのものと、なかなか行き合わない。山にかけては猟師がもっともくわしいのだ。出くわすたびにたずねていた。あるとき、猟師の口から願ってもないことを聞き及んだ。うねうねと横に長く、尾根がお盆のように広い山が近くにある……。

現代の地理学では、「平頂な隆起準平原の山地」と分類している。大地が活動していたころ、象の背のような丸いままに隆起したので、尖っていない平らな頂きをもち、それが平原のように広い。さすがよく旅をした坊さんであって、絶好の場を見つけていた。

ケーブルの山頂駅を出ると、すぐ前はズラリと土産店。いや、そうではなかった。高野山はだだっぴろい広場にバスが待機しているだけ。「山内行程表」という掲示板でわかるが、

本通りのお土産店と塔頭

もっとも近いところでも半時間あまり歩かないと町に入らない。壇上伽藍とよばれる信仰の中心地までは優に一時間はかかる。山の上がこんなに広大だとは、誰もがキョトンとするのではあるまいか。

「八葉蓮華」ともいわれるのは、まわりに八つの峰があって、その中の霊地を蓮華の花に見立てたわけだ。観光案内所でもらった地図だと、山上にのびた町並みはありがたい花よりも三本歯のフォークに似ている。それも柄を少し曲げたぐあい。三本歯の先っぽに、それぞれ大門、高野山高校、女人堂がある。町役場、警察署、小学校、大学などは歯の根かた。フォークのほぼまん中の一の橋を境にして、奥の院までの東かたは長大な墓所である。東は万をこす死者を弔い、西は生きとし生ける者の町、くっきり聖俗二分割のフシギな性格をおびている。

地形や町のつくりだけでなく、ここは例外ずくめである。伝統のある大寺には堂塔伽藍に加えて塔頭がつきもので、○○院、××坊が軒をつらね、それが門前町へとうつっていく。千二百年、法灯を守ってきた高野山には塔頭がおそろしくどっさりあって、三本歯から柄の西半分を埋めつくしている。表通りはほぼすべて寺であって、すきまにポツリポ

ツリとお土産屋や数珠、経本の店があるだけ。
——いや、これも早トチリだった。バスの窓からながめたときは寺ばかりだったが、ゆっくり歩くうちにわかってきた。やはりレッキとした町であって、裏手にまわると美容院、不動産屋、自動車修理工場、クリーニング店、モードの店、お好み焼、酒屋、文房具、医院、スナック……。観光客は表通り、生活者は裏通り。こちらは聖と俗とが表裏一体となって町をつくっている。

泉鏡花の小説『高野聖』には、年若い僧のエロチックな山中体験が語られている。小説では修行僧のイメージだが、正確にいうと高野聖といわれた人々は半僧半俗、あるいは非僧非俗、民間にいて高野の徳を説く。かつてはそんな人々が山中に「別所」とよばれるエリアをもっていた。

ほかにも「行人」とよばれる、やはり非僧非俗の多くの人がいて、「学侶」とよばれた僧たちと勢力を二分するほど力をもっていた。とするとここは聖と俗のほかに、どちらともつかぬ人たちのゾーンがあったことになる。過去の歴史に、そんな複雑な要素をやどしている点でも、きわめて特異な町といえるだろう。

世界遺産にもなった大観光地なのに、ホテルや旅館が一つもないのはどうしてか？　観光バスから降りた青い目のグループが、ぞろぞろと山門をくぐっていく。お参りではなくてお泊り。遍照光院、持明院、西門院、恵光院、総持院……。寺の多くが宿坊をもち、なかには部屋数五十、六十と、大旅館なみのところもある。一泊二食つき、たいてい別棟の立派な二階建て、冷暖房つき、ビール、お酒のお代わりもできる。強いて旅館とのちがいをあげれば、食事が精進料理でナマものがつかないこと、お世話くださるのが着物・白足袋の女性ではなく、作務衣にはだし、頭の剃りあとの青々した男性であること、さらに朝の勤行に——気が向けば——加われること。宿泊案内にはカラー写真の夕食メニューもついている。

カラス・カーで目が覚めた。朝のおつとめにフランス人有志と加わったので、心がはればれしている。たしかケーブルでもバスでも日本語・英語につづけて、通常の中国語・韓国語ではなくフランス語でアナウンスしていた。同じく世界遺産の有名な大聖堂をもつフランスの町と姉妹都市を結んでいるせいかもしれない。密教は宇宙観や哲理とかかわっているので、理論好きのフランス人の好みにも合うのだろう。

こちらは理論よりも実務であって、甍ずくめの町並みを歩きながら気になってならない。宗教法人は無税と聞いているが、これだけお寺さんに町域を占められていて、町の財務は成り立つのだろうか？——だが、すぐ気がついた。シロウトの目には全山が聖務の館のようでも、高野町財政課の職員には、お山を埋めて一流旅館が軒をつらねている。アルコールの明細つき領収書が、しっかりと町の金庫を支えている。

一の橋の手前の苅萱堂に、説教節で知られる苅萱物語が絵解きされていた。民衆に涙をしぼらせる因縁ばなしを通じて、ありがたい高野浄土のイメージがひろまったのだろう。空海は聖地を定めたが、伽藍づくりはほとんど実現しなかった。宗教的天才は実務や運営は苦手であって、たいてい二代目、三代目に有能なマネージャータイプがあらわれ、組織をととのえハコモノをつくり上げる。なにしろ気が遠くなるほど長い歴史をもつ寺であって、時の権力と巧みに折り合いをつけながら法灯を守ってきた。

奥の院につづく約二キロの参道は、さながら日本史偉人コースである。武田信玄、上杉謙信、明智光秀、織田信長、石田三成、豊臣家一族……敵味方あい乱れて石塔が林立し

ている。曽我兄弟や初代市川団十郎もいる。主だった大名家がこぞって菩提を弔う碑を残している。江戸時代のあるころから、競うようにして弘法大師の膝下に記念の碑をつくるのが流行した。むろん、寺方にそんなモードをしかけた知恵者がいたからだ。大名家とのつながりは経済的援助の点でも欠かせない。

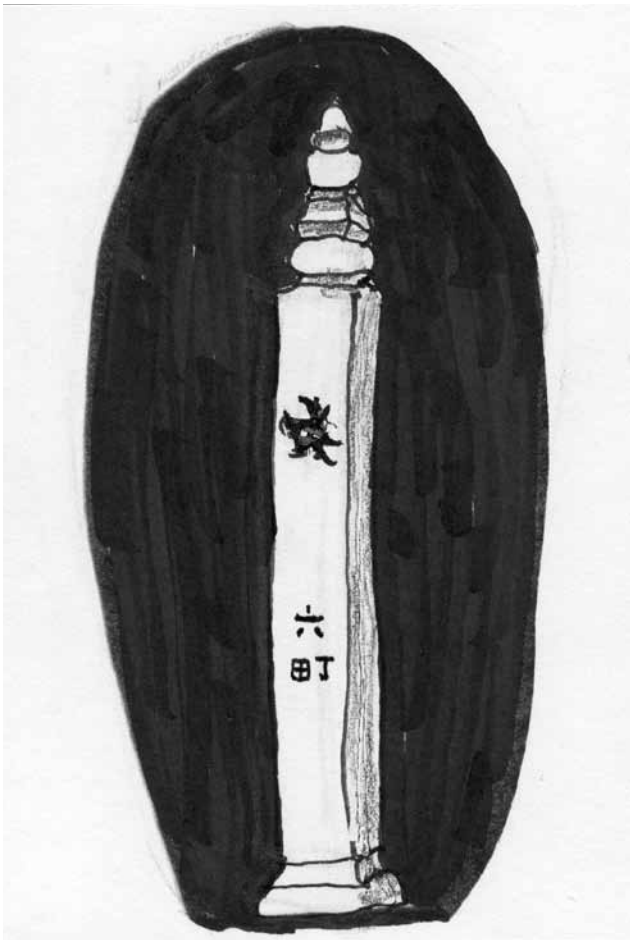
明治維新後の排仏毀釈で権力との蜜月が一挙に崩れた。そのころ打ち壊されたり廃寺になったケースは全国にごまんとあるが、高野山はどうだったのか？「高野六木」とよばれ、ゆたかな樹木にめぐまれた寺領も召し上げられた。記録によると、一九世紀前半の天保年間の寺院総数七五〇、民間の家屋約三〇〇に対して、明治前半期は寺四三六ヶ寺、戸数一五四戸（すべて借家）。人口七七二人（みな男）とある。大きく衰滅の危機に瀕していたことが見てとれる。

一見のところ、西のはしの大門が入口で奥の院がどんづまりのようだが、かつて「高野七口」とよばれる七つの道がお山と里をつないでいた。当然であって、山上は何一つ生産性のない消費都市であり、衣食住にわたるすべてを下から上げなくてはならない。紀ノ川の高野口が舟運の入口として、遠路からの物品がそこから運ばれてきた。日常の品々は里の集落が特化して受けもった。インテリア専門の職人衆の村もあった。千二百年の歴史はまた宗教を核とする物流のネットワークの歴史でもあった。

『漢方薬原典』『地蔵菩薩本願経』『大黒天秘法』『高野山百佛』『佛像図鑑』『九星術』『陀羅尼字典』……。古書店のガラス戸に書目がはり出してある。いちばん知りたい高野山物流の歴史をまとめた本はなさそうだ。宗教を経済の目で見ると、多々モンダイが出てくるのかもしれない。

奥の院をまわり、苅萱堂の前までもどってくると、ヒマそうな男性二人と出くわした。一人は苅萱関係のショップの人、もう一人はケース台によっかかっている人。どちらも作務衣に足は草履、頭は剃りたてながら青々としていないのは、年輩になると青みが失せるせいらしい。

よっかかっている人から聞いて知ったのだが、長大な墓所は十一班のグループが担当し



高野街道の町石

古書店のショーウィンドウ

ていて、順ぐりに移りながら掃除をしていく。まわりの大杉から雨のように枯れ葉が落ちてくる。日ごとに生え出てくる草とコケ。豪壮な五輪塔は一基だけで家一軒もの敷地がある。マッチ箱のマイホームの掃除とはわけがちがうのだ。

以前なら「行人」とよばれていた職種だろう。代々の人もいれば、世俗を絶って山に上がり、生涯の仕事とした人もいる。たしかに雑事万端の下積みの人がいなければ大寺は運営できない。かつて行人衆が僧侶集団と勢力を二分したというのもうなずける。ことのついでに高野聖についてたずねると、簡単になれるそうだ。ショップの人が用紙をくださったが、正式には高野山真言宗参与会といって、年会費（個人）一万円。

「あなた自身もこの高野聖となって、ご自身のためまた未来の子孫のためにも、お大師さまと共に崇高で慈愛に満ちた教えを唱道しようではありませんか」

よっかかった人によると、東日本大震災のあと、「ガイジン」の観光客がめっきりへったそうだ。

「あちらさんには東も西もありませんからナ」

よっかかったままそう言って、剃りあと黒い頭をピシャリとたたいた。ほかにもいろいろ、お寺さんにはマル秘事項にあたることの耳学問をした。真偽のほどはともかくとして、行人タイプの人はつねにリアリストであって、本には決して書かれないたぐいを知ることができるものだ。

蓮花谷（れんげだに）、小田原通、千手院橋、本山前。メインストリートをせわしなく車が往きかいしている。宅配の車が目につくのは、現代の物流の多くを荷なっているせいだろう。高野七口は国道371号、高野龍神スカイラインなどと名をかえて健在である。巨大な大塔につられて見すごしがちだが、壇上伽藍の西のすみに丹生（にう）明神、高野明神、十二王子百二十伴神がまつられている。空海は密教霊所をひらくにあたり、土地の古くからの地主神を大切にした。まずその社（やしろ）を勧請してから、自分の本拠地にとりかかった。諸国をまわって日本人と日本の風土をよく知っていた人の知恵である。

そこから大門までは小づくりの民家が多い。七口のうちでも、もっともよく利用された大門口の並びであって、昔は茶店や土産物屋が並んでいたと思われる。観光の流れがケーブル経由になってのちは、しもた屋風の家並みになった。

高野山の大門は唐の都の入口にあったように大きい。何度も火災にあって、現在のものは江戸末期の建造というが、柱の太さ、木組み、反りぐあい、すべて悠然としていて、何ごとにもチマチマしがちな日本風景のなかの珍しい例外だ。

すぐ前が急角度に落ちこみ、視界いっぱいに空がひらけている。かつて急坂を歩いてやってきた人々は、かなたの高みに一点のった朱色の門を見はるかし、まさしく高野浄土に迎えられる気持がしただろう。

荷台に花いっぱい積んだワゴン車が走り上がり、大門わきの広場で急停車した。そこに町の車がとまっていて、制服に名札の人が待ちかねたように手を振った。四年後の平成二十七年は弘法大師高野山開創千二百年にあたり、寺では大法会がいとなまれる。町当局も下準備を始めたのかもしれない。スローガンは〝生かせいのち、大師のみ教えいまここに〟。いかせ―いのち―いまと「い」の字でつないであって、ちょっぴりイベント会社作成風だが、いかにもひびきがいい。大門の前方は聖俗とけ合ってひと色の広大な空、そこに苦心のスローガンがゆっくりとただよい昇っていくようだった。

（いけうち　おさむ）

連載Ⅱ
ホスピタリティーの
手触り66

真夏のヴェネチアにて

旅行作家
山口 由美

何百年前から存在する壮大なテーマパーク

ミラノのホテルで「明日から暑くなりますよ」と言われたが、本当だった。今年はなかなか夏らしい太陽が顔を見せないと人々が嘆くヨーロッパだったが、私たちがヴェネチアに向かったその日から、少なくともイタリアには夏がやってきたようだ。観光客でごった返すサンタ・ルチア駅を出ると、照りつける太陽が、目も開けていられないほどにまぶしかった。

二十余年ぶりの再訪。今回、スリランカの旅行手配を生業とする友人とヴェネチアを訪れた理由は、アマンリゾーツなど、いわゆるアジアンリゾート建築の創始者といわれるスリランカ人建築家、ジェフリー・バワの足跡を訪ねたかったからである。

スリランカがセイロンと呼ばれていた時代、裕福な家庭の出身であったバワは、第二次世界大戦の最中、英国のケンブリッジに留学、一九四五年の夏にイタリアを旅したとされる。ヨーロッパ戦線は日本より早く終結していたとはいえ、戦争の痛手の癒えないころである。そのイタリアで、彼はいくつかのヴィラと庭にほれ込み、それらの一つを入手して、悠々自適の優雅な生活を送ろうと夢見た。大戦中の英国でロールスロイスを乗り回していた放蕩息子らしい発想である。しかし、戦後の経済混乱により実家が没落。イタリアで見た夢を自分の手で故郷のスリランカに再現すべく、彼は建築家になるのである。そうして誕生したのが、熱帯の環境を背景に、ヨーロッパのライフスタイルと洗練を融合させた建築だった。それが、一九九〇年代以降、究極の贅沢の形として人々を魅了したアマンリゾーツなど、いわゆるアジアンリゾートの原型になったとされている。

当時、バワがほれ込んだヴィラのひとつが、ヴェネチアとパドヴァを結ぶブレンタ運河沿いにある。イタリアンバロックの巨匠、アンドレア・パラディオの代表作のひとつ、ヴィラ・フォスカリだ。ブレンタ運河沿いは、ヴェネチアが繁栄を極めた時代、貴族や裕福な商人がこぞって夏の別荘を構えた場所である。そうしたロケーションは、いつの時代も富を得た者の心を離さなかったのだろう、バワが訪れたころは、ブラジル人の富豪が所有していたという。一九世紀後半から二〇世紀初頭にかけてアマゾンの天然ゴムがブラジルに膨大な富をもたらした時代があったが、そうした背景によるものなのかもしれない。

ヴィラ・フォスカリの訪問を目的とした私たちも、バカンスシーズンの観光客となって、真夏のヴェネチアの雑踏の中にいた。

ヴェネチア、ダニエリ前のゴンドラ乗り場

ジェフリー・バワが憧れたという
ヴィラ・フォスカリ

車のないヴェネチアではヴァポレットと呼ばれる乗合船が、一般的な人々の足となる。駅前のチケット売り場には、ガイドブックや地図を広げた観光客の長蛇の列ができていて、ようやく乗り込んだヴァポレットは、通勤列車のように混んでいた。

大きな荷物と一緒に、もみくちゃになって乗船する。やがて、大運河の両脇に展開するヴェネチアの街並みに歓声が上がり、カメラが向けられる。

あの時もそうだった。

ふいに二十余年前の記憶がよみがえる。一九五〇年代の名画『旅情』の冒頭シーンがそうであるように、私が初めてヴェネチアを訪れた時も、今と変わらない、お決まりの旅のプロローグがそこにあった。

イタリアに暮らした作家・須賀敦子は、そうしたヴェネチアの特性を『ミラノ　霧の風景』に収録されたエッセイで次のように書いている。

〈ヴェネチアという島全体が、たえず興行中のひとつの大きな演劇空間に他ならないのだ。（中略）近代に至って外に向って成長することをしなくなったヴェネチアは、自分自身を劇場化し、虚構化してしまったのではないだろうか〉

ヴェネチアを旅することは、その芝居に組み込まれる楽しさだと、彼女は言う。

そうだとするならば、これほど完璧な「観光地」もないのかもしれない。ディズニーランドが誕生する何百年も前から、壮大なるテーマパークとして、ヴェネチアは存在していた。ラスベガスやマカオのカジノホテルが、そのミニチュアを再現することで「夢の空間」を演出しようとしたお手本の、紛れもない本物がそこにある、そんな感想もあながち的外れではないのかもしれない。

大運河沿い、サンマルコ広場の脇にあるサン・ザッカリアの船着き場で降りると、目の前が名門ホテルのダニエリで、橋を一つ隔てて、ロケーションの割に値頃な四つ星ホテルのサボイア・エ・ヨランダがある。宿を取ったのは、路地を入った先にあるその別館だった。

朝食は、大運河前の大通りに面したテラスレストランで取る。車が通れないヴェネチアでは、二一世紀の観光客も一六世紀の旅人と同じく、徒歩で迷宮のような都市を観光するしかない。中国人の観光団、豪華クルーズ船の乗客たち、インド人の大家族、さまざまな人の群れが、観光客が観光客でいることに、世界で最も素直でいられる街、ヴェネチアに飲み込まれてゆくのだった。

（やまぐち　ゆみ）

旅の図書館

新着図書紹介

ユネスコの世界遺産委員会は二〇一一年六月、「小笠原諸島」と「平泉」を相次いで世界遺産に登録することを決めた。

大陸と一度も地続きになったことがなく、独自の進化を遂げた動植物の多い小笠原諸島。日本では、屋久島、白神山地、知床に次いで、世界自然遺産に名を連ねることになった。

また、平安時代末期に奥州藤原氏が建てた寺院や庭園などから構成される平泉の遺跡群は、普遍的意義を持つ「浄土思想」との関連が深く、仏教と自然崇拝が融合した日本独自の空間となっていることなどが評価され、わが国では十二件目の世界文化遺産となった。

今回の小笠原諸島と平泉も、過去の例と同様に、国内のメディア報道ではトップニュースの扱いを受け、改めて、世界遺産登録が〝国民的関心事〟であることを印象づけたが、その一方で、ユネスコという国際機関や世界遺産条約の目的・登録基準などについては、あまり知られていないのが実情だろう。

A5判　190ページ
定価　2,200円
法律文化社

本書『**世界遺産学への招待**』（**安江則子編著、法律文化社**）は、そうした現状も踏まえ、ユネスコや世界遺産条約そのものから、世界遺産研究の必要性と可能性に至るまで、広く世に知らしめることにより、世界遺産を読み解く材料を提供しようという研究者の熱意が凝縮された労作だ。

そもそも、ユネスコは、第二次世界大戦の惨禍を受けて、「心の中に平和のとりでを築かなければならない」という宣言とともに、教育・科学・文化の発展と推進を目的に設立された国連の専門機関であり、世界遺産も戦後六十年余にわたる活動の成果の一つと位置づけられるものと言える。

本書の巻頭言で、立命館大学大学院先端総合学術研究科の渡辺公三教授は、世界遺産という制度そのものも「ユネスコが世界に贈った貴重な遺産」となる可能性を指摘する。

立命館大学の「土曜講座」で、二〇一〇年一月から二月にかけて企画された「京都から考えるユネスコ世界遺産」という連続講演会をベースとする本書は、松浦晃一郎・前ユネスコ事務局長の講演と五人の研究者による論考によって構成される。

ユネスコ世界遺産条約は、一九六〇年代にエジプトのアスワンハイダム建設によってアブハンメル神殿（ヌベア遺跡）が水没する危機に見舞われた時、国際協力によってこの遺産を移転・保存しようとする運動を契機に締結されたものだ。

一九七八年に十二件の世界遺産が登録されたのを皮切りに、二〇一〇年までの登録件数は九百十一件に及ぶ。日本では一九九三年に屋久島と白神山地が自然遺産に、法隆寺地域の仏教建造物と姫路城が文化遺産にそれぞれ初めて登録され、一躍注目を集めることになった。

「観光立国」という旗印のもとで、訪日外国人旅行者の誘致拡大や地域観光振興の取り組みが積極的に進められるなか、日本では、すでに世界遺産に登録された十六件とは別に、十件を超える物件が世界遺産暫定リストに記載され、正式登録の実現を目指している。

本書第二部の「世界遺産における歴史都市の課題」「文化遺産の災害対策」「中国の世界遺産『麗江古城』と観光」などのテーマで専門家によって展開される論考からは、「世界遺産」という固有の文化の価値が、極めて細心の配慮と、個別の遺産についての詳細な検討、膨大な時間と多くの人々の労力によって保持されていることを、改めて痛感させられる。

（挑全）

財団法人 日本交通公社 出版物のご案内

■「バーチャルとの融合」が創る新しい観光

当財団主催「第20回旅行動向シンポジウム」採録集。昨年十二月のシンポジウムは「ソーシャルネットワークが拓く旅行の新たな可能性～『位置ゲー』が仕掛ける〝お出かけ〟モチベーション」と題し、新しいIT発想やITによってつながった新たなコミュニティーのなかから生まれてきた観光の芽吹きに迫りました。事例は、この二、三年でユーザー数を急激に増やしている大人気の携帯エンターテインメント「コロニーな生活☆PLUS（略称コロプラ）」。すでにバーチャルとリアルの間を当たり前のように行き来している若者が、バーチャルと融合したリアルな移動（旅行）という新しい楽しみ方を始めています。若者も本当は出かけたがっていて、要はきっかけ次第。「どこかへ出かけたい！」という気持ちは人間の根源的な欲求なのです。二〇一一年六月発行。

■地域の〝どがった〟に学ぶ インバウンド推進のツボ

数多くの地域がインバウンドを推進するなか、外国人旅行者の誘客をめぐる厳しい地域間競争を勝ち抜くのは、簡単なことではありません。地域特性や強みを徹底的に磨き上げることで他地域との差別化を図り、旅先としての価値を高めている地域、すなわち〝とがった〟何かを持ち合わせている地域でなければ、その存在は埋没してしまいます。本書はこうした点を踏まえ、規模や立地、資源などの面でそれぞれ異なる特徴を持った六つの地域を紹介し、そこから見えてくる、地域によるインバウンド推進の〝ツボ〟を明らかにします。二〇一一年五月発行。

■Market Insight 2011（日本人海外旅行市場の動向） 最新刊

日本人海外旅行マーケットの構造的な変化とその要因を詳細に解説したレポート。当財団の独自調査を基に、二〇一〇年の最新市場動向をカバー。中・長期的ダイナミズムを明らかにしています。日本語版、英語版あり。二〇一一年七月発行。

※当財団出版物のご注文はホームページからお願いします。担当：財団法人日本交通公社 観光文化事業部 電話03・5208・4704 http://www.jtb.or.jp

次号予告

●二〇一一年は、日独交流百五十周年。次号は、百五十年の両国間の交流の軌跡と、今後の観光や文化交流の在り方などをテーマに、各分野における有識者の方々からご執筆いただき、今後の交流の方向性について特集します。

研究調査だより

●新潟県胎内市には行政が整備したホテルやスキー場、飲食店などの観光施設が集積して存在しており、我々はこれら施設の活性化、さらには地域全体の集客力向上のためのプラン策定と実行を二〇〇七年度より支援している。

●昨年度には、出資者が胎内市や地元企業となり、経営陣に首都圏のホテル経営経験者も招聘して、主たる観光施設を一体的に運営する株式会社が設立された。現在、地元出身の従業員と地域外の人材で構成されるこの株式会社が、地元企業、行政とも連携しながら施設の活性化に取り組んでいる。

●また、胎内市は近年食材として多くの注目を集めている「米粉」の専用工場が全国で初めてできた場所でもあることから、現在、市民や飲食店、菓子店、米粉製品製造メーカー、米粉生産メーカーが一緒になって試行錯誤を繰り返しながら、米粉を活用したご当地グルメの開発にも取り組んでいる。

●こうした取り組みを我々も一緒になって進めることで、「多様な立場の方々が関わって取り組むこと」の重要性を改めて認識している。今後も、個々の地域に合った観光振興の方向性と取り組むべき事項を明確にしたうえで、1＋1を3にも4にもしていくための場づくり、体制づくりを支援することで、観光による地域の活性化に貢献していきたいと考えている。（守屋）

編集後記

◆三月十一日に発生した東日本大震災と大津波は東北・関東の太平洋岸に大きな被害を及ぼした。直後は交通網が寸断されて流通システムも機能しない状況にあった。やがて内陸部の観光地域では宿泊施設、インフラ等もかなり復旧してきて、宿泊客の受け入れが可能な状況になってきていた。しかし、残念ながら経済活動につながる各地からの訪問宿泊者が増えない状態が現在も続いている。東北には人を引き付ける多様な「力」がある。伝統文化、地域文化、祭り、温泉文化、日本酒文化などなど、東北の持つ潜在的な力を改めて確認することができた。

◆巻頭言では、有形無形文化財、地域の文化を保存、存続させることを先頭に立って推進する近藤誠一文化庁長官に、「文化の力」が復興へのベクトルになることを示していただいた。

◆東北の被災地復興に向けて尽力されている北原啓司弘前大学教授に東北の持つ「復元力」について、また復興へのパワーを生む仙台の都市文化の力を奥山恵美子仙台市長に、具体的な地域の連携で立ち上がった温泉米沢八湯会の遠藤直人氏に温泉の力について、日本そして世界で親しまれている日本酒の文化を多くの全国の飲み手や地元に支援されて酒造りを力強く続ける気仙沼の菅原明彦男山本店社長に、熱い思いを表現していただけた。復興会議へのご出席、ご出張そして日々のお忙しい業務に追われるなかで、皆さまにご執筆賜ったことに心より感謝申し上げたい。

◆被災後、早期に立ち上げた岩手県田野畑村の復興計画に参画している大隅一志主任研究員が、計画の大きな柱に据えられた観光復興のプロジェクト概要、方向性や具体的な取り組みに関して研究ノートにまとめた。今後、進捗状況に応じて掲載する予定。

◆全国には固有の文化があり、東北の魅力ある「文化の力」そして観光の底力を信じて、より多くの国内外の人々が行動を起こすことに期待したい。（片桐）

観光文化　第209号

第35巻5号通巻第209号

発行日：2011年9月20日

●

発行所：財団法人　日本交通公社
東京都千代田区丸の内 1-8-2
第一鉄鋼ビル
〒100-0005　☎03-5208-4701
http://www.jtb.or.jp

編集室：東京都千代田区丸の内 1-8-2
第一鉄鋼ビル　観光文化事業部内
〒100-0005　☎03-5208-4729
http://www.jtb.or.jp/publishing/

編集人：片桐美徳

発行人：志賀典人

●

印刷所：JTB印刷株式会社

禁無断転載

ISSN　0385-5554